

鷹一兄、55年間ありがとう

昭和33年卒 喜田 益生



斎藤鷹一 平成20年7月16日病没
遺族 妻 静子様

入学式後、数ある部の中航空部へ入部(当時、吉川、渡辺両先輩が上手に勧誘されたと思う)。以後現在も空に関心を持ち続けています。

貴兄は3回生でキャプテンとして良く部をまとめ、航空部の活動に貢献された。

高松、八尾、霧ヶ峰での大会、合宿生活、卒業後の現在までとお世話になり有難うございました。

新大阪から4ヶ月後の7月16日に訃報が入り、悲しい限りです。苦しい闘病から解放され、安らかにお眠り下さい。

「真照院浄空鷹岳居士」 合掌

昨年3月3日、貴兄からTELあり、是非会いたいとのこと、新大阪で奥さんを交えて会食し、2時間ほど話し合った。

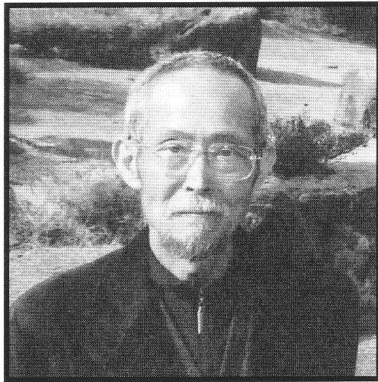
高校時代、同志社での4年間、そして社会に出、現在までの色々な出来事が、あーっという間に過ぎ去って行った。しかし、元気がなく、笑顔もなく、とっても淋しい一時でした。

地下鉄新大阪駅で別れの際、貴兄が乗る難波行きが先で、つり革にぶらさがりながら下を向いてこちらに目を合わせず、私もその姿を見て涙が止まらなく、駅のベンチに座り気持ちを落ち着かせてから千里行きの電車に乗った。

貴兄とは、高校3年の時に出会い、54年春、浜口と3人で同志社の門をくぐった。(牧野 鐵五郎大先輩と同じ)。

ひとり又一人、遥かなる友 斎藤 良和君へ

昭和39年卒 丹羽 正 拡



斎藤良和 平成20年5月30日病没
遺族 妻 恵美子様

7月末にもかかわらず、鶯・せみの声、紫陽花・百日紅と色々な季節が混在し、さらに野うさぎ・鹿の親子が時折姿を見せてくれる霊山妙見山の永楽霊園へ妻とお参りに行きました。大阪北部能勢町の「妙見山に主人を納骨します」と四十九日法要で奥様からお聞きし、平成20年5月30日に急逝した彼に会いに行ってきました。墓前に立つとこれまでの思い出がよみがえり、涙が止まりませんでした。なにしろ3月24日に窪田君と3人でゴルフをし、スコアはそっこのけでワイワイと笑い転げながら楽しいプレイをしたところでしたから。彼曰く「18ホール回れれば体力的にOK」などといっていたので、まさか2ヵ月後に訃報が入るとは何かの間違いだと思いを疑った。

今思い返すとあの時のプレイ中の会話はほとんど彼一人が途切れなくしゃべっており、やけに饒舌だった。ひょっとしたら本人はこの先が幾ばくもないと予感していて私たち二人に過去の思い出やら、ご家族との楽しい海外旅行の話を交えながら何かを訴えたかったのかも知れません。

特に航空部のゆく末を。

玉水河原のパチンコ時代や八尾飛行場での強烈な暑さ寒さの中での合宿など、今となってはどれも笑い話のオンパレードですが、彼との個人的な思い出に限定すると〈誠実さと思いやり〉の人、という印象だけが残っている。

彼は過去に2回私に手紙をくれている。それは今でも大切に残している。1通目は私の次男が急逝したとき。九州の勤務先から「姿は見えなくてもご子息の魂はお二人の側に常にあります。見守っておられます…」と

2通目はゴルフをしたすぐ後で、「航空部の後輩たちに成り代わってお願いがあります。2011年に創立75周年を迎えます。なんとか後輩たちのためにご協力をお願いいたします。これは私の個人的なお願いです。君の手からあたたかなご協力を後輩たちの手に届けてほしいのです」と。

これが最期の手紙であり遺言となりました。

ヨハネによる福音書 第12章24節が思い浮かびました。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが死ねば多くの実を結ぶ」

彼の死はきっと多くの実を結ぶことを確信しています。私も彼の意思を尊重すると心に刻みました。

ところで、最後となったゴルフのとき、右や左に山・坂を走るうちに腰を痛めてしまった。MRIで調べてもらったところ椎間板ヘルニアと判った。「ゴルフをやめられたほうがあなたのためです」とドクターストップとなった。

ひょっとしたら斎藤君が「こちらは腰痛もなく、いつも晴天で楽しくゴルフが出来るよ、早くいらっしゃい」と呼んでいるのかも知れません。彼に手を合わせながら言いました「もうすぐ逝くから今しばらく加藤君と待っていてください」と。

1962年の追憶 — 中河 英祐君を想う —

昭和42年卒 岩 崎 俊 樹



中河英祐 平成20年3月29日病没
遺族 妻 克子様

中河よ。

出せなかった年賀状が1通、残ったままになっている。君宛の分だった。

昨年11月、突然奥様から喪中の知らせを頂いた。3月29日に君が旅立ったと書かれていた。迂闊にも僕は“その事”を初めて知った。

今振り返れば、あれが予感だったかと思う。平成15年に何十年ぶりかで年賀状の交換を再開したのに、17年から止まってしまった。余程の事がと想像したもの、ご家族のご心中を考え、もっと正直に言えば、知ることが怖くて何もしないで来た。あの頃から闘病が始まったのか？

君の他界を知った晩、君に会おうとすぐにアルバムを引っ張り出した。学生時代の写真を数えたら、殆ど君の撮ったものだった。そうだ、当時数少ないカメラマニアだったな君は。何時も小型カメラ、確かオリンパスペンを持ち歩き、自分で現像していた。

お陰で僕の手元に残ったモノクロ写真は、不思議に1回生時代のもが多く、たちまち1962年に引き戻してくれた。

1962年6月。出雲路橋畔の鴨川河川敷でヘリコプター遊覧飛行イベント。これ、資金稼ぎのチームバイトだった。雨でずぶ濡れ、泥だらけの君が写っている。

7月。炎天下、地獄の玉水プライマリー合宿。あれはきつかった。君もトレシャツ、トレパン、ゴム長の勇姿でグロッキーになっている写真。

11月。八尾で関西初のソアラー単独合宿。曳航車はキャデイラック51年型。同志社は意気軒昂『関東何するものぞ』。そこに君が居た。

我々が入部した頃、部員数は50人近く、関西きっての大世帯。牧野伊兵衛教官、牧野鐵五郎教官、北尾直敬教官がOBで、輝かしい歴史を持ち、それが誇らしかった。そして秋にH-23C導入を控え、部全体が沸き立っていた。

学連割り当ての合宿だけでは搭乗回数が上がらず、西部支部に割り込んで、小倉遠征合宿までした。そして、我々62年度生は最後のプライマリーと最初のソアラーを1年次に体験した。正に、訓練体系が、旧から新へと移行する端境期の熱気の中に君と僕は居た。無駄夢中だった。

中河よ。君と出会った1962年の一日一日が鮮明に甦ってくる。合宿にアルバイトに、君と駆け寄り廻った365日、そして4年間には充実していた。何時も新町校舎に近かった君の下宿を襲い、青臭い人生論を戦わせた君の追悼文を書こうとは…。

今度の旅にカメラは持ったかい…合掌。